

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のことばを掲載いたします。

暑い日だった。ふと足もとを見ると、捨てられたジュースの空きカンに、蟻の行列が続いていた。人間なら当然汗をかき尽くして倒れると思われるような炎天下だ。だが、蟻は乾ききった甘味にさえもたかって、せつせと自分の巣へ運んでいる。

日本人はエコノミックアニマルと呼ばれ、働きすぎの批判さえ受けている。だが、我々は何のために働くのか。この目的意識をはっきりと持って働いている人が、いったいどれだけいるのだろうか。

職業というものは、世の中がそれを必要とするから成り立っている。食べもの屋、衣料品店などを営む者、学者、教育家、公務員など、世の中が必要とするから成り立っている。だから、もし世の中が自分の職業を必要としなくなれば、必要とされる他の職業に変わらなければならなくなる。

こう考えてくると、職業に就くことはそれぞれ、世の中への一つの恩返しである。自覚すべきであろう。しかも報酬を得ているのである。一枚の皿に食事を盛ること、一枚の上着を縫うこと、学校で教鞭をとるなどの仕事をするとき、世の中に尽くすというより、感謝をささげ、その職業にはまわりこんで、自分の誠意を貫き通し「ありがたいございました」と心に強くいだいてか



小さなことも コツコツと

丸山竹秋

かることが本当だ。そうでなければ、職業があるから、それで働いて生きているという、ただそれだけでは浅いものに終わってしまうのではなからうか。

蟻はいったい何のために、あんなにせつせと働いているのだろうか。冬の貯えのためにだけ働いているのだろうか。それは蟻に訊いてみないと分からないが、さて人間はどうか。人生の老年期に備えてせつせと貯え、何とかして住む所をつくり、家族と一緒に住むために貯え、子供たちが成人した時の、さし当たつての生活のために貯える。

このような生活で果たして充分であるか。人間が蟻のようにせつせと働いたところで、蟻の垂流にすぎないことになる。夏の日の蟻の働きのようになるまで、せつせと働くのはなかなか難しく、その点で我々は、いくらか蟻の真似をして働くにすぎないかもしれぬ。

はたして人間が蟻の垂流のままではいのであろうか。しかし、実際は、ただ貯えんがために働いている人、ぼやつとした目的のままに働いている人などが相当多いように見うけられてならない。それだけでは人間として不完全であろう。

職業に感激を持ち、感謝し、その仕事を通じて世の中が本当に立派になり、人々が幸せになることを念じ、自分のためというより、人のためにと、より高い次元で働くとき、初めて人は蟻の垂流を脱することができるのではなからうか。

『繁栄の法則』より